

次期長野市総合計画
(2027年度～2036年度)

まちの将来像(素案)について

令和8年2月
企画課

次期計画全体構成

計画期間: 令和9(2027)年度～令和18(2036)年度



(例)第五次長野市総合計画 「まちの将来像」



これまでの審議会、作業部会でいただいたご意見・ご提案について4つの視点で整理

1 みんながまちづくりを「自分ごと化」

・行政だけでなく、市民、企業、団体等多様な主体がまちのことを「自分ごと」として捉え、「他人任せ」にせず主体的な行動をとり、かつ協働したまちである。

～主体性・協働～

3 だれもが安心できる居場所、活躍できる舞台の創出

・全ての人々が健やかで安心できる、居心地の良い居場所があるまちである。
・子どもや若者だけでなく、大人も高齢者も、様々なことに気軽に触れ、学び、挑戦でき、活躍の場が充実したまちである。

～多様性・挑戦～

2 「長野市らしさ」の保全と発信

・善光寺門前町等のまちなみや里山の美しい景観や豊かな自然環境が守られたまちである。
・オリンピック・パラリンピックレガシーが次代へ継承されているまちである。
・「長野市らしさ」を表す地域資源を国内外へ発信し、人や企業に選ばれるまちである。

～独自性・継承～

4 ウェルビーイングを実感できる、持続可能なまちづくりの推進

・長野市独自の地域資源を有効活用し、域外の需要を取り込みつつ、地域で経済が循環するまちである。
・災害に強いインフラや豊かな生活基盤が構築、維持され、住み続けたい持続可能なまちである。
・SDGs推進の理念が引き継がれ、市民のウェルビーイング(幸福感)が高いまちである。

～持続可能性・循環～

4つの視点に基づき、事務局案として以下の4案を作成

案1

魅力満彩“ながの” ～住みたいまちはみんなで創る～

案2

余白のある都市“ながの” ～可能性をひらくまち～

案3

安心を未来へ紡ぐまち“ながの” ～日常から愛着を育む場所～

案4

幸せ波及都市“ながの” ～ワガコトでつむぐ未来～

案1

魅力満彩“ながの” ～住みたいまちはみんなで創る～

本格的な人口減少局面を迎え、社会情勢が急速に変化する中、将来を見通すことが難しい時代となっています。このような状況下でも、持続可能なまちづくりを進めるためには、市内外から「住みたい」「住み続けたい」と感じてもらえる「選ばれる都市」を目指すことが重要です。

①豊かな自然、里山の環境が保全され、②多様な主体が居心地の良さを感じる居場所や活躍できる環境が整い、③安全・安心な生活基盤が備わり、④地域独自の文化やまちなみ等の地域資源が受け継がれ、その資源を活かした産業が発展している、これらの要素が調和し、誰もが住みたいと感じる魅力的な都市となることを、「魅力満彩」として表現しています。

魅力にあふれた都市であることを、市内外へ発信し、人や企業に選ばれる都市を目指します。

また、持続可能なまちづくりを実現するためには、行政だけでなく、市民や企業、団体など多様な主体が地域課題を「自分ごと」として捉え、協力して取り組むことが不可欠です。従来の枠組みにとらわれず、新たな価値を創出し、長野市の魅力をさらに高めていくことを「住みたいまちはみんなで創る」という副題に込めています。

案2

余白のある都市“ながの” ～可能性をひらくまち～

首都圏での生活の忙しさや住みにくさを感じる人が増える中、自然や癒しの環境を求めて長野に移住を希望する方が増えています。長野市では都市に経済的合理性や機能性だけを求めるのではなく、「ほっと一息つけるような深呼吸できる隙間」のある都市を目指します。将来像では、隙間があることを「余白のある都市」として表現しています。この余白には次のような要素が含まれます。

①空間の余白

機能的な都市機能を持ちつつ、雄大な自然と善光寺・松代などの歴史的なまちなみが保全され、豊かな生活環境が整備されていることで、心身がリフレッシュされ、日常生活を快適に過ごすことができます。

②感情の余白

多様な価値観を認め合い、互いに補い合うことで、人と人がつながり、安心して暮らせる心理的・社会的な居場所が確保できます。こうしたつながりが生まれることで、住民一人一人が安心感を持ちながら、様々なことに挑戦できる環境が整います。

③未来の余白

持続可能なまちづくりを進めることで、社会や経済の変化に柔軟に対応しながら、新しい可能性を模索し、未来に向けて発展していきます。

さらに、この余白の中で、多様な主体が積極的にまちづくりに参加することが重要です。副題である「可能性をひらくまち」には、挑戦する意欲を育み、個々の創造性やアイデアを活かしながら、地域全体で未来を築いていくという意味を含めています。多様な主体が、まちづくりに参加することで、長野市は多様性と協働の力を活かした持続可能な都市へと進化していきます。

案3

安心を未来へ紡ぐまち“ながの” ～日常から愛着を育む場所～

4つの視点から考える未来は、市民が安心して暮らせる「居心地の良いまち」です。

「居心地の良いまち」とは、豊かな生活基盤が整っていると同時に、多様性を認め合いながら、つながり、安心できる居場所があるまちです。また、長野市の魅力である自然環境や歴史的なまちなみも、「居心地の良さ」を感じる重要な要素です。これらの要素が作り出す「居心地の良さ」が、長野市に住みたい、住み続けたいと思われる「選ばれる都市」につながります。

「居心地の良さ」を10年後の未来、さらにその先へ引き継ぎ、未来に向けて長野市に住みたい、住み続けたいと思われる持続可能なまちづくりをつないでいくことを、「居心地の良さ」を「安心」と言い換えて、「安心を未来へ紡ぐまち」として表現しています。

また、何気ない日常の中で、人とまちの距離が少しずつ近づいていき、「このまちが好きだな」と思える瞬間が増えていくことで、みんなで住みやすいまちづくりを積極的に進めていくことにつながります。日常的なかかわりや体験を起点に、まちへの理解と共感が育まれていく姿を示すことを、「日常から愛着を育む場所」として表現しています。

案4

幸せ波及都市“ながの” ～ワガコトでつむぐ未来～

※「波及」に代わる言葉:「発信」、「増進」、「拡大」

4つの視点から考える未来は、市民が安心して暮らせる居心地の良いまちであり、市外から訪れる人にとっても「長野市らしさを」感じられる居心地の良いまちであり、「幸福」を感じられるまちです。

第五次長野市総合計画では、まちの将来像を「幸せ実感都市ながの」として、市全体の「幸せ」の総和の拡大を目指して、取り組んできました。次期計画策定に向けて実施したアンケート調査では、回答者のうち約7割の方が幸せと回答(10段階中「6」以上)しており、幸せを実感している市民が多くいる結果でした。

しかし、近年、ウェルビーイングという概念が注目され、第五次計画策定時以上に、市民の「幸福度」が重要視されています。人口減少下でも市民がウェルビーイング、すなわち幸福をこれまで以上に実感できる、持続可能なまちづくりを目指すとともに、幸福感を他者へ、そして長野地域の連携中枢都市として圏域へも広げ、「幸せ」の総和の拡大を目指していくことを、「幸せ波及都市」という言葉で表しています。幸福感を広げることで、長野市に住みたい、住み続けたい人を呼び込み、選ばれる都市を目指す意味も込めています。

また、全市を挙げてまちづくりに取り組むことを「“オールながの”で未来を創造しよう」と表現していましたが、一人一人の主体的な行動が縊りあい、一つの未来を創り上げていくことを、副題として、～ワガコトでつむぐ未来～と表現しています。 (よ)

※事…自分たちの生活の中に現れたり、自分たちがしたりする事柄。

我が事 自分に関係のある事柄、または自分の問題として捉えること

和が事 自然との調和、平和、和気あいあい、

輪(環)が事 人の(つながり)、環境、循環

視点1 みんながまちづくりを「自分ごと化」

作業部会WS意見

【第2回】(現状)

- 市民の「循環型社会(リサイクル)」への気持ちが薄い
- 自分で自分を守る意識がもっと必要
- 災害に対する地域差、温度差がある
- 自分たちのまちは自分たちでつくるという意識がない
- そもそも、人任せで無関心な人が多い

【第3回】(理想の未来)

- 市民参加が教育活動として定着している
- 市民の環境リテラシーが向上したまち
- 住民の防災・防犯に対する意識が高いまち
- 年齢、職業を超えた住民全員のまちづくり会議が開かれている
- 「人任せ」から「ちょっと参加」のモデルが出来上がっている

審議会・作業部会意見

- 「自分ごととしてまちや地域、長野市に積極的に関わっていくこと」が重要
- 「自分たちのまち、長野市をより良くするために何かできることはないか」と考え、実際に行動するような、そんな後押しをする言葉が必要
- 私たち一人一人が自分の問題として考え、行動できるような社会が大事
- 自分ごととして市民自らが主体となって長野を住みやすいまちにしていくことが大切
- 愛着を持つことが「自分ごと」につながると思う
- 人から押し付けられて自分ごとにするのは難しい。「愛着」を持っているからこそ、自然と自分ごととして考えられる
- アンケートの結果から、「自分たちがどうにかするのではなく、誰かが支援してくれればいい」と待っている状態が見え隠れしているのではないか

視点2 「長野市らしさ」の保全と発信

作業部会WS意見

【第2回】(現状)

- 長野市の風土、魅力を知っている子どもが少ない
- 自分のまちに愛着を持っている子が少ない
- 子どもたちは、長野市への帰属意識がない
- 環境教育による全世代のリテラシーの向上が大事
- 長野の良さをまちの表面に出す必要がある
- 善光寺の集客力を活かす
- 地元のプロスポーツチームを大切に
- オリンピック文化を子どもたちに引き継ぎたい
- オリンピックマークの付いた施設を活かす
- 「表参道はいいまち」と観光客は答えている
- 地元のフルーツを使ったお酒は売れている

【第3回】(理想の未来)

- 長野市の魅力を言える子どもがたくさんいる
- 地域の小さなまつりが継続して開催
- 善光寺で参加型のイベントが開催
- プロスポーツチーム主催の体験会が開催
- オリンピックを誘致している
- 駅前が長野らしいまちになっている
- 権堂アーケードが食べ歩きできる商店街になっている
- 長野ブランドの新しい農作物が誕生
- 中山間地域が光輝く場所になっている

審議会・作業部会意見

- 長野を訪れる人々が最も魅力を感じる点は、自然環境
また、まちなみについても、当然「善光寺」や「戸隠」、そして「松代」など、長野市の歴史的なエリアの保全が必要
- 長野市には独自の魅力がたくさんある
こうしたブランドをもっと広めていければいい
- 首都圏を中心に日常生活の忙しさや住みにくさを感じる人が増えている中で、長野県が提供する自然や癒しの環境に魅力を感じている方が多い
- 長野市の独自性、長野らしさをどのように出していくのかが重要
- 長野市の強みは、誰もが誇れる景観や豊かな自然にある
- 文化や自然に魅力を感じている人が多く、長野市の最大の魅力である
- 「長野市にしかないこと」や「長野市オンリーワン」という考え方は非常に重要
- 長野市の雪の景色を、善光寺と組み合わせてアピールできると良い
- 長野市の魅力が伝われば、若者が就職やその先の未来を描ける
- 広辞苑に「門前町」に象徴される都市

視点3 だれもが安心できる居場所、活躍できる舞台の創出

作業部会WS意見

【第2回】(現状)

- 若者の居場所が少ない
- 若者がのびのびできる環境が欲しい
- やりたいことが分からない子どもが多い
- 失敗できる体験の場を提供すべき
- 公民館などいつでも、どこでも学べる環境があるとよい
- 部活動の地域移行に対し、初めての子どもが参加しにくい雰囲気がある
- 地域に居場所が大切
- 身近に運動できる環境が欲しい
- 家や学校や会社以外のサードプレイスの充実が大事
- 社会活動に参加できる環境を整えてほしい
- アクセスしやすい場所に多様な人と交流できる場所を
- 駅のまわりに集まれる場所が欲しい
- 高齢者にとってスポーツしやすい環境整備をしてほしい

【第3回】(理想の未来)

- 若者の活動を後押ししてくれる場所がある
- 世代間で気軽に交流できる居場所がある
- 知らない人とも気軽に交流できる場所がある
- 学びたいことが学べる場所がある
- 子どもがいろいろな体験をできる
- いつでも、どこでも学べる環境が整っている
- 性別でいろいろなことを諦めることがない
- 地域活動に好きな時に参加できるまち
- 競技ではなく、体験や経験を重視した教育が受けられる

審議会・作業部会意見

- 住んでいる人たち一人一人の「居場所」を確保することが一番大切
- 文化や歴史、食、農業といった地域の魅力を活かした場所作りが重要
- みんなが、今の自分の居場所を実感できて、未来にも安心感を持てる長野市であつたら良い
- 「私はここに、いてもいい」という気持ちの居場所も必要ではないか
- 教育が地域に開かれることで、子どもの居場所が増え、安心感が増す
- 世代を超えた居場所づくりが重要
- 居場所は場所があるだけでは、誰かにとっての居場所にならない
居場所を作っている人が重要である
- 発言しても良いと感じることが、居場所や安心につながる
- いろんな人がまちの中にいられる居場所があるということは、非常に魅力に繋がっていく

視点4 ウェルビーイングを実感できる、持続可能なまちづくりの推進

作業部会WS意見

【第2回】(現状)

- 介護施設が見つからない
- 病院が多くても一定の地域に密集している
- コンパクト+ネットワークを推進すべき
- 行きたいときに行きたい場所に行けない
- 電気が止まることが一番困る
- 善光寺+αが欲しい
- 観光資源の見せ方にも工夫が必要
- 体験型のスポットが増えると◎
- オリンピックマークの付いた施設を活かす
- 郷土のものを新しいお土産のブランドとしていけたらよい
- 二次産業で核となるメーカーが欲しい
- オリジナル、オンリーワンのほかとの違う新しさが欲しい
- ふるさと納税など、農産物のブランド化、発信力が大事

【第3回】(理想の未来)

- 施設への入居に困らないまち
- 遠隔でも、都市部の医療機関を受診できる
- エネルギー自給のモデルが確立されている
- 災害が起きても電気が止まらないまち
- 災害に強いネットワークが整備されている
- 好きな時に好きな場所へ移動できるまち
- スキー場と連携した観光資源が誕生
- 特産品などのPRが盛大に行われている
- 長野ブランドの新しい農作物が誕生

審議会・作業部会意見

- 特に公共交通などのインフラをできるだけ現状のままで保っていただきたい。
- まちを拠点にコンパクト化を進めていくこと、既存集落と生活利便施設を公共交通でつなげていくことも重要である。
- 公共交通の意味での都市部と中山間地域のつながりも重要である。
- 防災意識の向上や強いネットワークづくりが必要
- 災害に強いインフラ整備と地域ネットワークの構築は重要
- 長野市は非常に住みやすく、素晴らしいまちであるため、その良さを維持し、現状を保つことが重要である。
- 「現状維持自体が挑戦になる」ということが基本的な考え方になっている
- エリアで経済が回るような仕組みを作り、地域が総合的に活性化できるような仕掛けが必要。
- アーティストが舞台に立てる機会を増やし、活動が続けられるよう稼げる環境が必要。